

医療療養病棟における看護師の在宅療養移行支援の特徴

豊島由樹子^{*,1)}、加納江理²⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学看護学部、²⁾三誠会北斗わかば病院

【目的】

医療療養病棟には急性期・回復期病棟からの自宅退院が困難な医療的ケアニーズの高い患者が入院している。医療療養病棟からの自宅退院を促進するには、患者・家族の望む在宅療養に向けて、看護師がイニシアチブを発揮して生活全般に渡る療養移行支援を実施することが求められる。そこで、医療療養病棟からのよりよい在宅療養移行支援への示唆を得るために、医療療養病棟における看護師の在宅療養移行支援の特徴について明らかにすることを目的とする。

【方法】

医療療養病棟に勤務しており在宅療養移行支援を行った経験のある看護師で、調査目的・方法に自由意思で賛同し研究協力に同意の得られた者、2病院5名を対象とした。インタビューガイドを用いて、医療療養病棟における在宅療養移行支援の内容、急性期病棟・回復期病棟の在宅療養移行支援との相違について、60分程度の半構成的面接を実施した。インタビューは同意を得て録音し、逐語録を質的記述的に分析して、医療療養病棟における看護師の在宅療養移行支援の特徴をカテゴリー化した。

【倫理的配慮】

本研究は、実施前に本学の倫理委員会の承認(認証番号15030)を受けた上で、倫理的配慮を遵守して実施した。

【結果】

対象の看護師経験年数は10～26年で、医療療養病棟勤務前に4名が急性期病棟、1名が回復期病棟において在宅療養移行支援を経験していた。医療療養病棟からの在宅療養移行には、＜患者における特徴＞として、入院前より機能低下をきたし医療的ケアを抱えるため家族に遠慮を感じやすいことがあげられた。また＜介護者における特徴＞として、介護者が高齢や家族員が少ないため介護力が不足しがちで、医療的ケアのある在宅療養に対して不安が大きいことがあげられた。看護師は、急性期・回復期病棟のように入院日数が定められていない医療療養病棟であるからこそ、患者・介護者に期限を迫るような無理強いはせず＜患者・介護者が納得し自信がもてるまで時間をかけて丁寧な指導＞していることが語られた。また退院後は次の病院・施設に患者を送る急性期・回復期病棟とは異なり、医療療養病棟の患者・介護者の特徴から、在宅療養後にも病状悪化による看取りや介護者の疲弊が予測されるため＜患者・介護者の今後の変化を予測した継続性のある支援＞を行っていた。例え入退院を繰り返しても＜患者・介護者の希望に沿った在宅療養生活を短期間でも達成＞することに看護師は在宅療養移行支援の意味を見出していた。

【考察】

医療療養病棟の看護師は、医療面や介護面から在宅療養に対して不安を抱える患者・介護者に対して、退院期限に合わせた在宅療養移行支援ではなく患者・介護者に合わせて丁寧に在宅療養移行支援を行っていた。また在宅療養後に起こりうる患者・介護者の変化をも予測した継続性ある支援が行われていた。医療療養病棟を長期滞在型病棟と認識するのではなく、看護師が医療療養病棟における在宅療養移行支援の特徴を捉えることで、患者・介護者の意思を尊重したQOLの高い生活の促進につながることを示唆された。

【論文発表の状況】

第10回日本慢性看護学会、第7回せいいい看護学会で発表予定である。